

# 2年目に入った草原の国 モンゴルへのボランティア について

研究所ブロック 代議員  
波戸京子



## はじめに

皆さんこんにちは、私はこの夏パンテックユニオンの代表4名のうちの1人としてモンゴルボランティアツアーに参加させていただきました。8月19日から27日までの9日間という短い期間でしたが、とても貴重な体験をさせていただきました。

パンテックユニオンがモンゴルボランティアツアーにメンバーを派遣するのは今回で2回目になります。このツアーの目的はモンゴルで支援物資の贈呈式等に列席すると共に、現地の人達とふれあうことです。御存知だと思いますが、先ず最初にモンゴルという国について簡単に説明させていただきます。

モンゴルは北側をロシアと国境を分かち、南側は中華人民共和国と国境をなすという大国に挟まれた国です。皆さんよく御存知のバイカル

湖南側に位置し、また国土の南部は、これも皆さんよく御存知のゴビ沙漠です。今回は首都ウランバートルとその近郊及び南ゴビ県の2ヵ所を訪れました。面積は日本の約4倍、国土の8割が1,000m以上という高地の国です。人口は約240万人、約3割の75万人が首都ウランバートルに住んでいます。ソ連邦の崩壊（ペレストロイカ）と同時期（1989年）に社会主義から資本主義へ体制を変更しました。遊牧民が人口の40%を占めていて世界一の遊牧民の国です。

## モンゴルへ

8月19日の夜19時30分に関空を定刻通りに出発した、JAL直行便は日本時間の24時にはモンゴルの首都ウランバートルに到着していました。飛行時間は僅か4時間半です。

空港の建物に入ると深夜にもかかわらず、赤





十字の副総裁ネルグイ女史と子供達が、可愛いバラの花束を一人ひとりに手渡ししながら出迎えてくれました。

入国の手続きを終えて空港のロビーに出ると先程の赤十字の子供達とともに報道陣が待ち受けていました。入国手続きはとても簡単に終わったのですが、取材のためか、ロビーでは随分待たされました。

私達はACEC（アジア・アフリカ環境協力センター）の瓜谷氏主催のツアーメンバーとしてモンゴルを訪れましたが、報道陣は彼が目当てで空港に来ていました。

瓜谷氏の長年にわたるモンゴルへの支援活動はモンゴル国内では高く評価されており、彼は現地ではとても著名な日本人なのです。

真夜中なのに赤十字の子供達は私達がホテルに向かうバスに乗り込むまでおつきあいしてくれました。小さな子供もいて申し訳ない限りでした。

首都ウランバートルの郊外には稼働していない工場が幾つもありました。現在、工場の稼働率は約50%ということで、ソ連邦が崩壊してロシア人の技術者達が引き上げてしまい、工場が稼働しなくなったためです。その同時期（1989年）にモンゴルは社会主義体制から自由主義経済へと路線変更しました。近年、都市部に人口が集中しつつありますが、仕事もなく不景気とのことです。

ウランバートルでは相当量の車が走っていました。市内は信号機が少なくて曲がり角で渋滞していたりして、車の運転も荒いように見

受けられましたが、私たちの旅行中は交通事故を見かけることはありませんでした。道路はでこぼこしていて雨でも降ればたちまちぬかるみと化してしまいそうな箇所が幾つもありました。

市内でヤマト運輸や佐川急便の中古車を沢山見かけましたが、これも日本企業のボランティア活動の一環だということでした。

## 念願のご対面

国立自然博物館で念願の恐竜の卵と対面しました。子供の頃、ゴビ沙漠で恐竜の卵が発見されたというニュースをテレビを見て、そのとき恐竜の卵はまん丸ということを知りました。鶏の卵を見て育った私は楕円形ではなくてまん丸い卵がこの世の中にあるということが何故か一大事件でした。以来いつかきっとゴビ沙漠へ本物の恐竜の卵を見に行くんだと心密かに決めていたので、それが思いがけなくも長年の夢が叶うことになったのです。万歳!!



## THEゲル

南ゴビ県ではホテルではなく、標高2,000m以上の高地にあるゲル式のツーリストキャンプに宿泊しました。初めてゲルに宿泊しましたが、夏だというのに明け方寒さのために目が覚めて

しまいました。早朝キャンプの係りの人がストーブの火をつけに来てくれると部屋の中は、瞬く間に暖かくなりました。一日の温度差が大きいため夏といえどもストーブは必需品です。ストーブの燃料は薪と石炭（貴重品??）なのですが、マッチだけではなかなか点火できなくて持参したチャッカマンが大いに役立ちました。

本来ゲルには電気も水道もお風呂もありません。しかし、ツーリストキャンプのゲルは電灯がとまり、また別棟にトイレやシャワーの設備があります。トイレは水洗で私達が宿泊した三カ所のツーリストキャンプの各施設はどこも清潔でした。

ストーブ、トイレ、シャワーの係りなど、いたるところにその専属の人が配置されており、こまめによく働いていました。

外貨獲得のためか、観光施設の整備に力を入れているように見受けられました。

### トイレ事情

都市部の公共施設やホテル等はトイレの設備が整っているように思いましたが、一步郊外に出ればそうはいきません。国立子供センター所有のキャンプ地に宿泊したときは水が全く使えませんでした。また旅行中ドアのないトイレや屋根のないトイレにもお目にかかりました。勿論そういうところは水洗トイレではありません。

大草原では下手にトイレを探して駆け込むより大自然の中で用を足すことをお勧めします。こちらの方が清潔で断然気持ちいいに決まっているからです。しかし、私が訪れた地方の草原は起伏が少なく草むらすらなくて、身を隠せる窪地を探すのにひと苦労しました。

とにかく、モンゴルでは水と紙は大変貴重なものなので、モンゴルを訪れるときはチリ紙をいっぱい持参しましょう。

### センチメンタルミルクウェイ

私は寒がりなのでゲルに宿泊したとき、用心してかなり厚着をして寝ましたが、それにもかかわらずお手洗いにいきたくなくて夜中に目が覚めてしまいました。しかたがないので、おもむろにサンダルを履いて懐中電灯を持ってゲルを出て、キャンプの端っこにあるお手洗いで出かけていきました。

何気なく頭上を見上げて、まさに星が降るといふ表現がピッタリの別世界に、一瞬息を飲んでしまいました。

手を伸ばせば届きそうなところに天の川（ミルクウェイ）がありました。北斗七星や様々な星が、日本で見るより断然大きく見えるのです。夜空を飽きずに眺めていると、時々、流れ星が流れては消えていきました。

私はゲルに宿泊した4日間、この夜空の大スベクタクルをお手洗いに起きる度に楽しみました。

最初は大感激してひとりで飽きずに眺めていたのですが、あまりの素晴らしさに、この感激を誰かとわかちあいたくなりました。この星達の大競演は一人で楽しむより二人で楽しむ方が良いと思います。星空を見るときだけはカップルでご覧になることをお勧めします。

通訳の青年に流れ星を見ることができてラッキーだと言ったところ、モンゴルでは”星が落ちるなんて”と余り歓迎されていないと教えてくれました。

流れ星は日本では幸運の印なのに、夜空を見上げれば毎晩でも見られる流れ星は彼らにとって有り難くもなんともないものようです。所変われば品変わるとはよくいったものです。

## 遊牧民のゲル訪問

最初に訪問したのはツーリストキャンプ近くのゲルでした。遊牧民は訪問客を拒まないといい、突然の訪問にもかかわらず、ご馳走が次から次へと出てきました。馬乳酒、モンゴルティー、チーズ等いっぱいご馳走になりました。手造りチーズは案の定とても酸っぱくて私の好みではなかったのですが、出された食べ物は一応口にするのが礼儀なので嬉しそうな顔をして有り難く頂戴しました。皆さん異国で初めての食べ物にトライするときは上手に小さなものを選びましょう。

縫いかけの民族衣装をみて感激していると着てみてはと勧めたので、早速、民族衣装を着せてもらって記念撮影に収まりました。

「ゲルを訪れた全ての客は寝食を保証される。」これも生活の知恵なのでしょう。お隣といっても20~30km<sup>2</sup>はざらに離れている遊牧民の生活です。旅の途中やっと見つけたゲルに宿泊を拒否されれば旅人は、野垂れ死にするしかありません。

何人家族か不明ですが親子三代が同居しているようでした。なのにベッドは3つしかありません。後でわかったことですがひとつのゲルにベッドは3つが普通なのだそうです。

家財道具は必要最小限のものだけなのでしょう。入り口正面奥に美しくペイントされた箱形のタンスがひとつあるきりで、そのほか大型の革製の旅行鞆のようなものがベッドの下におさまっているくらいで、あとは何もありません。タンス、鞆の一つひとつに鍵が掛かっています。家具も少ないのですがゴミを全く見かけません。私達がばらまいたキャンデーの包み紙がゴミにならないかと心配になってしまったくらいです。

最年長のおじいさんが家長であり、ゲル内での家長の居場所は決まっています。ゲルに招かれた客は家長の席を外して座ります。突っ立ったままだと失礼にあたると言われて私も慌てて座りました。

ゲルの外には乗用車（ドイツ製）が停まっていた。トラック、オートバイ等自家用車を所有しているゲルを多く見かけました。

日本なら小学校高学年位と思しき兄妹が4~5才位の妹の子守をしながら羊を追っていました。下の妹が寂しさのためか、兄たちの気を引こうとしてわあわあ嘘泣きをしているのが何とも言えず微笑ましくて眺めていました。泣きすぎたのか一筋の鼻水が見え、私が慌ててティッシュペーパーを取り出そうとしたところ姉が走り寄ってきて指先で妹の鼻水を上手に始末してしまいました。かつて日本でもよく目にした光景



です。

次に訪問したゲルでは駱駝に乗せて貰いました。遊牧民の家族は台所用のゲルと客間兼寝室のゲルの2つを所有していました。お金持ちなのか、普通なのか?? よくわかりません。

ゲルの中央の一番よい場所にドライラマの写真が飾ってありました。その近くに黄ばんだお父さんの若かりし頃の写真などが誇らしげに飾ってありました。写真は彼らにとってとても大切なものなのでしょう。

ウランバートルのデパートの中の写真屋さんの前には若い男女のカップルが行列をなしていました。そういえば赤十字のキャンプで子供達が最も興奮したのがポラロイドカメラでした。写真を写す機会など滅多にないのでしょう。

### ホントに番犬!?

ゲルの入り口近くに2匹の犬がいました。番犬だというのに、大挙してやって来た私達を見ても一向に吠えません。勝手気儘に私達が触れるがままに身を任せてくつろいでいる様子は番犬というイメージから程遠いものがありました。それがゲルを狙う狼や泥棒などには猛然と立ち向かうというのですから見事という他ありません。

とても静かな国で、とにかく雑音がなく、犬も吠えません。モンゴルの犬はストレスがないから吠えないのだと引率者の瓜谷氏が力説され



るが本当なのか、直接犬に聞いてみたいものです。

9日間、様々なところでモンゴル犬に出会いましたが、一度としてその鳴き声を耳にすることはありませんでした。

### 慌ただしい夏休み

モンゴルの夏の気候は北海道のそれに近いように思われ、太陽の日差しはさすがに強烈ですが、日陰に入れば快適そのものです。当然ですがクーラー等は必要なく、あの何ともいえない不快感に包まれる夏場の関西から来た私には爽やかこの上ないところでした。

学校の夏休みは6月1日から8月末日までの3ヶ月間と長期間です。一年の大半を雪に覆われる国で、気候が穏やかで快適なこの季節は勉学に最適のはずが、夏休みが3ヶ月もあるなんて勿体ないと思って質問したところ、「暑いときに勉強なんて出来ませんよ。いい季節に思いっきり遊ばなくちゃ。」と言われてしまった。国民性なのか腹が据わっているのか、それにしても愚かな質問をしたものです。あ～あ恥ずかしい。

遊牧民にとって夏場は日本の農繁期と同じで、搾乳やチーズ作りなどで最も多忙な時期になります。子供といえども貴重な労働力になるため、街で寄宿していた子供達もゲルに帰って労働に従事するのです。子供達の夏休みはとても忙しいのです。

### えっ! そんなに見えるの!?

モンゴル人の視力は5.0あるといわれますが、一体何%が先が見えるのでしょうか? モンゴルには近視の人はいないのでしょうか?

これは実話ですが、2~3年前、モンゴルを訪れた日本人の大学生達が乗った車の車輪がぬ

かるみにはまって、大草原の真ん中で立ち往生してしまっただけです。いろいろ試みたが車は一向に動きません。日が暮れかけて、夏といえども草原の夜はとても寒く、万事休すかと思ったとき、モンゴル人が馬で駆けつけてくれました。彼らが立ち往生している姿が遠くから見たのです。彼らははるか彼方に仲間がいるから呼んで来るといい、彼らが指さす方を眺めましたが日本人にはなにも見えませんでした。そして待つこと一時間余り、多くのモンゴル人が応援に来て、日本人達の車はぬかるみから抜け出すことができました。

### ガンバレ、オンボロBUS

南ゴビ県を小型バスで移動しました。見渡す限りの緑の草原は日本から来た私たちの心を和ませました。道路標識等は見かけられず、バスは何処に進むのか、道路を走ったり草原を走ったり自由自在に進みます。かれこれ1時間走りましたが対向車に出会うことはありませんでした。悪路をかなりのスピードでぐんぐん走っていくので震動が激しく、油断していると身体がバウンドして座席から転げ落ちそうになりました。

車体の一部が取れてエンジンが覗いているオンボロバスを指さして、メイドインロシアかと聞くと、運転手の青年がそうだと答えました。そして自分を指さしてメイドインモンゴルだと



言って笑いました。

行けども行けども草原で、何処まで行っても木をみかけません。モンゴルに来て木を見かけたのは首都の街路樹等とキャンプ地の要所要所に植樹したと思われる木だけでした。

赤十字のキャンプ地からの帰途、私達の乗ったバスがオーバーヒートしました。各自持参のペットボトルの水を供出しました。バスはだだをこねながらもなんとかウランバートルまで私達を運んでくれました。バスも運転手さんも悪路をお疲れさまでした。

### やっぱり私は日本人

緑豊かな草原を見やって、同行した誰かが「勿体ない、耕して野菜を作ればいいのに」とため息混じりに呟きました。日本人なら誰もが一度は抱く素朴な疑問かもしれません。その土地に留まって、その土地を耕して生活の糧を得ている農耕民族の日本人ならではの発想です。農耕は定住民族だからこそできるのです。

一方、モンゴルは放牧を生業としている遊牧の民で成り立っている国です。当然のことですが現政府は遊牧民が一定のリズムで住居を移動する自由を保証しています。

現地の人からモンゴル人は牧草地を耕すことを嫌うのと教えてくれました。その人は一度手を加えた土地を牧草地に戻すことはとても難しいともいっていました。



その地にビルがそびえていない、高速道路が走っていない、住宅が建っていない、農耕していない等、何かをしていないと土地を遊ばせていると思ってしまうのは日本人の性なのでしょうが。

土地を耕すという日本人。  
土地を傷つけるというモンゴル人。

日本人よ心配はご無用です。彼らは怠けているのではありません。大自然の恵みを受けてテントひとつで大地に寄り添って生きているモンゴル人と日本人とでは土地に対する概念が全く違うのです。彼らは生活の糧を総て生み出してくれる大地に畏敬の念をもっているのです。

### 駱駝の泪

移動の途中駱駝の群と行き交いました。モンゴルの駱駝はふた瘤駱駝です。ふた瘤駱駝はひと瘤駱駝よりも寒さに強いそうです。

あちこちに群れていた駱駝を通訳の青年が大声で追い立てると、一方向に向かって列をなして整然と歩き出したのには驚きました。成人した駱駝が子供の駱駝を囲むようにして移動していくのが印象的でした。駱駝は常に弱いものを囲むようにして移動するそうです。

また、朝、放牧すると放っておいても夕方には飼い主のところに戻ってくるといいます。さすがに大自然の中で共に暮らす人間と家畜なら



ではと感心しました。

駱駝はとても大きくて可愛い目をしていません。美しい音色を聴かせるとその大きな目から涙を流すそうです。残念ながら今回そのチャンスには恵まれませんでした。駱駝の涙を一度見てみたいものです。

### プロペラ機が一番最後に乗りましょう！

ウランバートルから南ゴビ県へはプロペラ機で移動しました。南ゴビの空港へ、向かう1時間半の空の旅は快適そのものでした。

60人乗り位のプロペラ機は座席が決まっておらず、スチュワーデスが機体のバランスをとるために、乗客に1カ所に固まらず、まんべんなく座るように指示していました。最後に搭乗した客3名は客室が満席のため操縦室へと案内されていました。「いいなあ。私も最後に搭乗すればよかった。」



国内線は天候に左右されやすく、地肌がむき出しの滑走路は雨が降るとぬかるんで飛行機が離着陸できなくなります。いつ欠航するか分からず、便数も少ないに違いありません。1日に1便ぐらいなのでしょう。

日本のように満席だから次の便でどうぞとは簡単には言えないのでしょう。

## 野に咲くエーデルワイス

一年中氷河の残るヨリーン・アムヘピクニクへでかけました。バスはゴビ沙漠の南端の草原をひた走りに走ってなだらかな丘陵地帯へ入って行きました。窓外をよく見ると丘陵のあちこちに直径10センチ位の穴があいています。目を凝らして辺りを見ていると、いたいた鳴き兔が顔を覗かせていました。茶色の鳴き兔はバスの音に驚いて一瞬にしてその姿を穴の中に隠してしまいました。鳴き兔以外の動物もいたようですが、見分ける間もなくその小さな姿が現れては消えてしまいました。その小動物はハツカネズミのようなリスのような、遠目には小さくてすばしっこくて可愛いという印象を受けました。

渓谷の入り口でバスを降りて渓谷への片道3キロ余りの道は、馬で行くもの徒歩で行くもの各々三々五々進みました。この渓谷は英語でイーグル渓谷といい、その名のとおりはげ鷲の生息する渓谷なのですが、残念ながらはげ鷲には出会えなかった。鷲は賢く、易々とは私達にその姿を見せてはくれませんでした。また、はげ鷲の胃と糞が東洋医学では薬として重宝されて



いるようです。

途中の自然博物館で見たはげ鷲の剥製を見て驚きました。はげ鷲には髭があったのです。賢い鷲はモンゴルの人々に尊敬され、モンゴルの警察のマークに使われています。

丘陵地帯の最高峰で2,800メートルはあるところで、私たちは少なくとも2,700メートル位のところを散策していることになりました。あちこちに咲いているハーブの香りを楽しみながら歩いていると、溪流の湧き水に行き当たりました。ために一口飲んでみると美味しいものでした。

“一年中氷河が残る渓谷”とのキャッチフレーズの渓谷は、猛暑のため氷河は溶けてかけらも残っていませんでした。春には例年にない雪害、夏には猛暑、世界中あちこちで異常気象が発生しています。

渓谷からの帰途、他のメンバーがエーデルワイスを見つけたと教えてくれた。

ガイドのNINGINさんが渓谷で拾ったヘビの抜け殻を見せてくれました。ヘビの抜け殻は癌の特効薬だということで、癌で入院している友達に持って帰るといって大切にバッグの中にしまいました。

ツーリストキャンプに戻るとガイドの方が足下の草原を指さして羊の餌になるニラだと教えてくれました。よく見るとネギを細く小さくしたようなものが地上から6～5センチの高さで生えていました。傍らのレンゲの花とよく似た薄紫の花がニラの花だということで、早速ちぎって食べてみました。なるほどニラの味がしまし





たが、日本のニラよりみずみずしくて柔らかく、このニラで炒め物をしたら美味しいに違いないと思いました。これなら日本でも簡単に栽培できそうだ。持って帰って育ててみたい衝動にかられたがルール違反になるので諦めました。

### ワタシって美食家

旅行中、食事がとても美味しくて毎回楽しみでした。羊肉料理がメインの国なので、羊肉特有の臭いがある程度覚悟して出かけたにもかかわらず、旅行中お肉の臭いが気になることが一度もありませんでした。というよりそういった事実を思い出すことすらありませんでした。それどころか食卓に上る羊の肉はいつも柔らかく調理されていて、その美味を大いに堪能させてもらいました。ただし料理の量が多く食べきれずに毎回残してしまいました。それにしてもモンゴルのお食事は思いのほか癖がなく、何の抵抗もなく食べられるので通訳の青年にツーリスト用の特別食かと尋ねたところ、家庭料理と殆ど変わらないとの答えが返ってきた。

小麦粉を使った料理もいろいろといただき、ポテトもよく登場しました。あるときオレンジ色のポテトだと思って一口食べたところ、サクサクしていて初めての食感にであいました。この何ともシンプルな味の正体はボイルした蕪でした。また、しっかりとして食べ応えのあるモ

ンゴルのパンは私の好みでした。果物も見かけは貧弱ですが、甘くて美味しく、どちらもツーリストには安価でありがたい存在でした。

赤十字のキャンプで羊の蒸し煮料理をご馳走になった。羊を一頭潰して、適当な固まりにバラし、そのバラした骨付き肉を牧場でよく見かけるアルミの牛乳缶のようなものに水と熱く焼いた握り拳ほどの石数個と一緒に入れて蓋をします。2時間ほど地面の上でごろごろと転がすと出来上がります。やはり骨付き肉は美味しく、当然のごとくスープも濃厚でイケル味でした。モンゴル独特の太短い麺とモンゴルニラを使ってこのスープでラーメンを作ったらとびっきりの”モンゴルラーメン”が出来ることとと思いました。

食後、職員の方が例の牛乳缶のようなところから取り出した石を手のひらに乗せてくれました。ほの暖かさの残るその石は羊の油でガラガラしていました。石を握っていると身体によいといわれ、また石をそのまま患部に当ててもよいそうです。

なんといってもヨリーン・アム渓谷のピクニックで食べた直火焼きのバーベキューがジューシーで私には最高の美味でした。本当にもう一度食べてみたいものです。

帰国後、同行した他のメンバーにモンゴルのお料理は美味しかったねと言ったところ、あまりよい返事が返ってきませんでした。味覚はそれぞれ個人の嗜好に左右されることを忘れてい



ましたが、しかし納得できません。「同行のメンバーよ、旅行中あんなにぱくぱく食べていたではないか。口に合わなかったなんて信じられない。」

お酒は勿論ウオッカです。食事毎にウオッカの盃を傾けている左党もいました。モンゴルに国産ビールがないので私はもっぱらドイツビールのお世話になりました。空気が乾燥しているためかビールが喉に心地よくいただきました。

### 国立子供芸術センター訪問

センターのロビーで歓迎の踊りなどが披露されたあと、二階の会場で、感謝状及び記念メダルの授与式が行われました。授与式は国賓級の人を歓迎する部屋で行なわれ、瓜谷氏の存在を大きく感じた。

センターの子供達も遠巻きながらセレモニーに参加してくれ、総裁のツェンドルチェ氏が昨年1年間で1,000人の訪問客があったと挨拶されました。来客の対応だけでもひと仕事であり、このような多くの来訪者は子供達の勉学の邪魔にならないのだろうかと心配しました。

常時120人位の子供達が普通の学校に通いながらセンターに美術の勉強に通っています（一



般家庭の子供及び赤十字の子供等)。たまたま周囲に大人達がいなくなったので、日本から来た子供達は勇気を出して習いたてのモンゴル語でセンターの子供達とお喋りを始めました。私がか메라を向けると子供達は慌てて会話を止めて、はにかみながらポーズを取ってくれました。

旅行中、ホテルのロビーや国立子供芸術センターの貴賓室等で豪華に飾られた花を見かけましたが、全て造花でした。草原の草花は別として、空港で歓迎のためにいただいたバラの花が、滞在中目にした唯一の生花であったことに旅の終わりに気が付きました。赤十字の皆さんの真心の出迎えにあらためて感謝したい気持ちです。

### 里子たち

赤十字ではその事業の一環として両親のいない子供やなんらかの事情で両親と離れて暮らしている子供達を支援しています。パンテツクユニオンの里子達も赤十字のお世話によるものです。

日本を出発する前から里子に会えるかどうか分からない、そういうお国事情なのだと言われていました。でも私は子供達のことを知りたく、日本を出発するときから里子達の情報を日本に持って帰ることが今回の旅の目的と決めていました。だから、赤十字のキャンプでパンテ



ツクの里子に出会えたときは、このチャンスを逃すと二度と会えないのではないかとの思いで子供達に矢継ぎ早に質問を浴びかけせました。

子供達は私の予想を遙かに越えて、それは見事に気持ちよくはきはきと答えてくれました。複雑な家庭事情を持った彼らがすすく育っている姿を目の当たりにして、インタビューの最中何度も胸が熱くなりました。

里子達のインタビューを開始したのは夜の9時を過ぎていたと思います。私達はキャンプファイヤーの喧噪から少し離れた真っ暗な草原の中にいました。そんな私達に誰かが気付いたのか、暫くして車のライトが私達の輪を闇の中から救ってくれ、お陰でビデオ撮影が容易になりました。私も興奮していたのだと思います。慌ただしくインタビューを終えて、暫くして車のライトをつけてくれた方にお礼を言いそびれたことに気が付きました。誰だったのか今だに心残りです。

通訳の方が、「こんなことは初めて」といって、少し高ぶった声で私に有り難うと言ってくれました。「貴方がいたから私達は子供達と言葉を交わすことができたのです。こちらこそ有り難う。」こうして私達はとても爽やかな気分でインタビューを終えました。

#### パンテックユニオンの里子情報

ニャムダワー (女子)

生年月日 1983.2.6 (17歳) 中学4年

好きな学科 文学 歴史 作詞をしている

将来の夢 法律家 文学も続ける



家族構成 両親 四人姉妹

両親 父.....事情により家族と暮らせない

母.....病弱で親戚の家にお世話になっている

四人姉妹の長女四人とも赤十字の施設に入っている。彼女は施設でもお姉さんの役割らしく、セレモニーの間も忙しく、年少者の面倒をみていた。

過去に芸術センターで花(造花)作りと歌を学んだことがある。歓迎のセレモニーで独唱してくれた。最近英語を学び始めたので、日本の私達に英語でお手紙を書くといってくれた。お手紙が楽しみである。

一途 迷いがない 未来への希望だけ

バトフレル (男子)

生年月日 1989.3.5 (11歳) 小学校2年

将来の夢 空手

家族構成 両親 姉二人 兄二人 弟一人

両親 父.....病氣療養中

母.....病弱、頭痛持ちで働けない

屈託無く明るい

### マンホールチルドレン

郊外で太いパイプが幾重にも走っているのを見かけました。セントラルヒーティング用の温水パイプで、市中に入るとそのパイプは地中に潜っていました。長らく抱いていたマンホールチルドレンについての疑問が現地に来てようやく解けました。

冬場 - 30度にもなるというモンゴルで、マンホールの中で人々が生活できることが理解できなかったのですが、現地の青年がマンホールには温水パイプが通っていると教えてくれました。

マンホールチルドレンとは、当初は両親に捨てられたり、両親と離別した子供達が生き延びていくためにマンホールでの共同生活を余儀なくされたことから始まったものです。近年マン

ホールチルドレンの様相が変化し、より深刻な社会問題となってきています。

今やマンホールには赤ちゃんから大人まで住んでいます。また自分の意志でマンホール暮らしを選択した子供もいます。そしてマンホールに暮らす人々で一つの社会が出来上がりつつあり、地域ごとに組織をとりまとめるボスが存在し、そのボスの下ひとつの秩序を保って生活をしています。

そしてこの隔離された社会はもはや通りすがりの外国人が可哀想にというて品物を施す段階はとうに過ぎてしまったようです。今やそのような施しはマンホールに住む人達の神経を逆なでするだけでなのです。彼らが今最も欲しているのは仕事なのです。当人達も国家も品物ではなく、同情でもではなく、根本的な解決を望んでいます。

今回その実態を垣間見て、自分の軽々しさが恥ずかしく思いました。たとえ善意から発したことであつたとしても、私たちの行動は自己満足のためだったのだと思い知らされた気がしました。これからは通りすがりのお節介はやめにして、モンゴルの人達が国を挙げてマンホールチルドレンの解決に取り組むことを誠意をもって見守り続けていきたい、そしてその現実があることを忘れない自分でありたいと思しました。

### 日本人墓地

日本人墓地はウランバートル郊外のなだらかな丘の上にあります。墓地の入り口に掲げられた銘板には北海道から九州まで全国各地の1,000人余りの人達の名前が刻まれていました。

悲惨な戦争を辛うじて生き延びたにもかかわらず、生きて故国の土を踏むことが叶わなかった方達の墓です。太陽の恵みを浴びて豊かに広がるこの草原も囚われの身である彼らには果てしなく続く魔の原野に見えたことでしょう。極



寒の地で重労働を強いられた彼らは絶望の縁で幾度も幾度も雪原の彼方の故国に思いを馳せたに違いありません。無念にも異国の土となった方達に、皆で「ふるさと」の歌を唄って黙祷した。太陽の光が優しく墓標に降り注ぎ、墓所から眺めると一面に草原の海が広がっていました。

第二次世界大戦後、ロシアからモンゴルに送り込まれてきた捕虜は約3万人といわれています。ウランバートルには日本人捕虜が強制労働で建造した会議事堂、外務省、オペラハウスなどがいまだに現役のまま残っています。

戦後55年、モンゴルに日本人墓地は数カ所あるといわれていますが、軍事施設の敷地内にある墓地もあって、日本政府は未だにその存在の全てを確認できていません。

過去の歴史を切り捨てて近代化をひたすら押し進めてきた経済大国日本の姿がそこにありました。

異国の地に眠る人々の思いとはほど遠く、墓地は平和そのものでした。

### 教 育

国内に工業専門学校が二校あり、その一校を訪問しました。夏休みの上、夜の9時過ぎという時間にもかかわらず、校長先生、教頭先生自らが自家用車を運転してホテルまで迎えに来てくれました。16才から1期2年勉強できます。希望すればもう2年勉強できます。並行して高

校の勉強も可能であり、現在全校生徒600名の授業料は無料で教材は政府が提供しています。希望者は全員入学できる上に地方出身者のための宿舎もあります。しかし、学校が出来て15年、机も椅子も開校以来のものを使用している模様で、学生の約60%が貧しい家庭出身の子供達です。学校は資金不足のため皆で作品を製作して、それを売ったお金で資金の足しにしているそうです。

設計、機械加工、配管等の授業の教室を見学しました。同行者いわく、溶接の機械などとても古いとのこと。日本の工場等で使い古したものを提供できれば多に役立つことと思います。日本の私達はものを送ればそれで一仕事終えたと思いがちです。しかし実際はそうではなく、そこから本当の支援が始まるのです。

たとえ中古品の機械であったとしても、現地にとっては初めての機械の受け入れとなり、それにもない新たな技術指導と新たなメンテナンスが必要となります。送料も馬鹿にはならず、当地で本当に使えるものを選んで送ることが必要です。相手の立場に立つということは難しいものです。

## モンゴル訪問をとおして

社会主義の影響か、訪問した施設で、要職にある人の半数以上が女性でした。そういえばモンゴルの女性はスラリとしていて総体的に日本女性より大柄に思えました。日本人と姿勢が違うのか、足が長くて体型がヨーロッパ人のようで、とても同じ蒙古斑をもつ民族のようには見えなかったのが意外でした。

9日間の旅行中、数人ですがモンゴルの人達と会話を交わすことができました。私の出会った人々は私のありきたりで平凡な質問に対して、一般論ではなくて自分の意見を述べてくれました。彼らと語れば語るほど、彼らが自国に対して強い誇りを持っていることが感じられて

眩しく感じました。この心地よい程の愛国心はどこから湧き出て来るのでしょうか？北の大国ロシアと南の大国中国の狭間で地理的にも政治的にも常に非常な緊張を強いられながらも大国の脅威に屈しなかった民族の誇りなのでしょうか？

ともかく大国相手に隣国の複雑な役目を果たしながら遊牧という独自の文化を堅持しつつ自国の独立を守り抜いた彼らの熱き思いにエールを送りたいと思います。

赤十字のキャンプファイヤーで子供達とダンスを踊り、小さな子供達が私めがけて群がってきました。そして私の手を痛い程握って離さない、私も子供達の小さな手をギュと握り返しました。頭上を見上げると今日も降るほどの星が輝いていました。

里子のひとりのニヤムダワーちゃんは、自分を支援している私達の存在を知って、彼女は「人生で一番の感動です」と語っていました。

パンテックユニオンは、皆さんのカンパ金を資金として、里子2人のために毎月3,000円の養育費を負担しています。里子たちに会って、私が何気なく出した100円、200円、500円が彼女たちの人生に影響を与えていることを実感しました。

## 最後に

ボランティアとは相手を知ることから始まる。

相手に興味を持つことが大切であり、相手を知って、「ああこんなに違うんだ」とわかることが大切、現場を知ることが大切だと感じました。もしも貴方にチャンスが巡ってきたなら、先ず出かけて下さい。自分の目で見て耳で聞いて、先ず行動してみてください。そしてその次に立ち止まって考えればいいのです。知ることは大切、相手の立場を理解することは本当に難しいことです。でも相手を知ることには自分を知ることに通じるのです。異文化を全て受け入れ

る必要はなく、受け入れようとする、理解しようとするその姿勢が大切だと思います。

何も外国だけが異文化ではなく、自分以外の周囲の人々は一人残らず異文化です。会社の上司だけでなく、友人だって、家族だって、恋人同士だって異文化です。誠意を持って理解しようとする努力をしなければ成り立たないのではないのでしょうか。

続けることの難しさと大切さ

瓜谷氏はたった一人で始めたボランティアをとおしてモンゴルと日本の架け橋としてなくてはならない人になっています。人間は誰でも感動し、決意できます。しかし感動はすぐ忘れ、決意は直ぐ揺ぎます。瓜谷氏のすばらしいところは感動を行動に移し、続けていることだと思います。続けていけば、それがいつかは道となり後に人が続くようになるはずですが、でも、先に述べたとおり継続することは難しく、だからこそ相手を知ること、相手に興味を持つことが大切なのです。

私自身、今回のモンゴルとの出会いを大切に、これからも何らかの形でモンゴルという国にかかわっていきたいと考えています。

最後に、こういうチャンスを与えて下さった皆さんとユニオン、会社、そして全ての皆さんにあらためてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

